

の菊地氏と江口氏の三人は朝鮮の大邱の部隊に入隊した。

翌、八月九日にソ連の満州攻略十五日敗戦を聞く。

大邱から京城に下車して総督府に向いて事情を話し、満州にいる家族探しのため満州行きを決意したが、三十八度線越境をソ連軍の許可をとるのは至難の業であり、これをあきらめて山形へ帰って家族を待つことに決める。

いかに軍隊の命とは言え、男一人引き揚げて家族を外地におき放ちての在郷は、何とむなしく胸の痛む思いであつたことか。

昭和二十一年八月二十七日、待つていた子供たちが四人ともやせこけ、それでも何とか生きて帰ってきたのである。話によると妻のムラさんは開拓部落から、弥栄駅、佳木斯、綏化、ハルビン、新京で越冬し、翌二十一年錦県へと南下、帰国に一步一步近づいていたのに疲労困憊と栄養失調のため、ついに七月二十七日死亡したとのことである。子供たちだけが原田さんたち山形部落のお世話で八月二十七日新庄に着いたので

ある。

四人の子供を生かそうとして病身でありながら尊い犠牲になった妻、ムラさんに対して佐藤末児氏は切齒扼腕して妻よ、ムラよ、見てくれと言わんばかりに、引き揚げ後、故郷にもどり、現在、飼料畑四町五反、成牛、育牛合わせて六十数頭、搾乳量、日産八百キロ生産、水田五町五反、畑一町五反を耕作している事実を、亡き妻に涙を流して報告する佐藤翁である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

わたしの歩んだ道

栃木県 越井 静子

思い起こせば、昭和八年五月ごろのある日、地元の小学校の校長先生に呼ばれました。先生のお宅にお伺いいたしましたところ、「家内と二人で高田さん(旧姓)の希望を聞いて、良き御縁に向けてお仲人した

い」と申されました。余りに突然のお話で、心臓は高なり顔から火が出る思いでしたが、せっかくのお話でしたので、一応私の心の中に秘めています。

その当時、昭和初期の世の中は不景気のどん底時代、大きな問屋さんが次々と倒産、銀行が次々と倒産、昔の男子は中学、女子は女学校在学中、一カ月五円月の謝が払えず退学者が増えるばかりでした。私は女学校を卒業したら師範の二部を出て、学校の先生になることを夢見ていました。しかし父は、「女が月給取りになつたら生意気になつて、将来お嫁にもらつてくれる人がいない。女は学校を卒業したなら花嫁修業に励み、良縁を探しお嫁に行くことが女の務めだ」と、頑として聞き入れてくれず卒業と同時に、月々お米二斗とお金五円を添えて当時有名な和裁所に二年間、内弟子に入れられてしまいました。

その後、生花・編物・洋裁とお稽古事に通わされました。私も二十歳を過ぎようとする年齢でしたので、そろそろ仲人さんも出入りするようになりました。ちようどそのころ、校長先生からお話がありましたので、

こんな不景気のどん底にあつて、この日本の国土の狭いところにおいて苦勞するより、広い広い満州に行つてのんびり暮らしてみたいと思つていたので、親にも話をせず先生のお宅に御相談にまいりました。ところがその場で、「僕の知り合いの那須のある村の村長さんで、その弟さんが満州で活躍しておられるという人がいるのですが……」と言われましたが、開拓団員と聞き、「私は商家の生まれ育ちで開拓関係の方とは、とても務まりません」と申し上げました。が、その青年は本部勤めで、農業の方は満州人家族に任せているとのことでしたので、少し考えさせてくれるよう、約束して帰りました。

一週間ほどたつて、同僚の校長先生とお二人で私宅へお見えになりました。両親には何も話していなかったのにどうしようも目の前が真っ暗になりましたが、今となつては父の成り行きを陰で見守るよりほかはないと覚悟を決めました。母は陰でおそろするばかり。そのうち、父から呼ばれておそろる奥座敷に入りますと、「お前、本当に満州の方まで……」父は

目頭を熱くして、言葉につまっていた。でもその日は、娘とよく話し合うことで改めて返事することになりお帰りいただきました。その晩、父から何も月陽も凍るようなところまで行かなくても、今、良縁の話があるのだからと、さんざん叱られなだめられました。しかし満州で軍隊を除隊し、満鉄に入社して三十年勤め、昭和八年ごろ大金を持って帰国し、当時では珍しい赤れんがの洋風の家を建てて、老後をのんびり暮らしている家庭が近所になりましたので、そんな話も父にしました。既に私の夢は満州に飛んでいましたので、決心の固いことを告げました。さすが頑固で封建的な父もあきれ果て、返答に困り、とうとうお前次第だということになりました。今度は村長をしていた長兄と校長先生とがお見えになり、事の成り行きを申し上げ改めてお願いし、写真を交換し両家結びの盃を取り交わしました。

時は昭和八年五月中旬でした。それから遠い満州との文通が始まり、その年の八月には帰国できるような便りでした。しかし、共励組合設立、仕入れ販売など

で多忙とか、いろいろ理由をつけて延ばしに延ばしているのは、「こんなに延ばされているのは、何かわけがあるのかもしれない」と、変な方に心配するようになりました。彼の兄もいささか心配になって「どんな様子なのか、一応見に行つてくる」と従兄を連れて弥栄村まで視察をかね行つてくれました。

十日後に帰国し、現地の様子を話してくれましたが、それは全く驚くことばかりでした。

どこまで行つてもどこまで行つても広い広い原野続き、その原野を見たこともない大きなトラクターで隊員共同で開墾したり、地ならしをしたり、ろくろく畝も作らずに大豆、とうもろこし、じゃがいもの種を蒔き付けたり、見るごと、聞くこと、成すこと驚くことばかりだったそうです。女たちは現地では手伝うようなことはなく、ただ家庭を守つていればよいとのことでした。日本の農家のお嫁さんたちより、はるかに幸せな日常生活が送れるとのお話でした。話半分でも寂しさは別として、生活上は心配ないだろうと自分なりに想像することができました。後で、彼の母から聞いた

た話ですが、長男が村長に在職時、連隊区司令部より、各家庭の二、三男で職を探している若い男子がいたら、是非満州開拓団員を募集するようにという通達があったようですが、なかなか申込者がおらず、(各県五十人募集)職責上、涙をのんで母と本人を説得し、承諾を得たのだそうです。彼が十一人の末っ子ゆえ、母は長男を恨んでしばらくは夜も眠れず、泣き明かしたものでしたと、話してくれました。

嫁入り道具は、いつ迎えにこられてもすぐ出発できるように、着々と揃えておきました。

翌々年の昭和十年七月、やっと彼の帰国の知らせを受けました。しかし、帰ってきたとは言え、栃木小隊長という責務上、団員の留守家族を訪問、お嫁さんについての相談やら、県庁司令部などへ、忙しく駆け回り、落ち着いて話し合う暇ありません。

八月一日、彼の母と長兄、仲人役の校長先生と本人、そして当地の校長先生、五人揃って見えられ、結納の儀を済ませました。私の誕生日八月五日入籍、十月一日結婚式、十月二日いよいよ新婚旅行かたがた、満州

に向け出発の日程が決まりました。

そのような次第で出発日までに、団員のお嫁さん四人、彼の従兄、甥、私の弟、同僚の新婚さんと私も二人、計十一人の団体が宇都宮駅に集合し、一路神戸に。そこで三泊して神戸港より乗船しました。玄界灘の荒海にもまれて、一同生きた心地もなく四日ぶりに大陸に上陸しました。大連より列車で、どこまでもどこまでも続く大平原を進み、乗客といえはみんなニンニクのおい、汚れた支那服を着た日雇労働者風の男女がほとんど。奉天、新京を通過してハルビン駅に到着しました。

ハルビンに着いてまず驚いたのは、公衆便所がないと聞かされたことです。見ればあちらこちらの倉庫の陰のような壁際で、かがんでいる姿が見られ、その人が立ち去ると放し飼いの豚が駆け寄って始末しているのが見え、二度びつくりさせられました。私たちは和服姿の裾長姿、どうやって用を足そうかとお互い困り果てましたが、どうにもならず、お互い後ろ向きになって周りを囲い、代わり番こに用を足したのでした。

本当に驚いて二の句が出ませんでした。

そこから海のような広々とした松花江を船で進み、佳木斯じふしで下船した。まず、弥栄開拓団連絡事務所に落ち着き、藤づるのようなもので編んだアンペラの上で長旅の疲れをいやしたのでした。そこで、佳木斯の写真屋さんから頼まれて連れて行った嫁になる娘が、ここへ一人置いて行かれるのはどうしても嫌だと駄々をこねてしまった。かと言って、栃木小隊に連れていくわけにも行かず主人も困り果て、弥栄団員を脱隊して佳木斯で警察官をしていた青年に頼み、預かってもらうことにしたのです。

いよいよ目的地へ向かうときになって、隊より司令が入りました。昨晩、追分峠が匪賊に破壊され、現在佳木斯の軍隊が出て、改修工事を急いでいるから、出発は明日にするようにとの伝令でした。

翌日は上天気でした。お弁当をいただき、女の私たちは馬車に乗り、男の人たちは徒歩で佳木斯の騎兵隊に守られ、山から山を分け入ってやっと追分峠に着きました。ところが壊された橋がいまだに完成していな

かったので、騎兵隊の護衛のもと、そこで野宿をせざるを得ませんでした。内地では、十月中旬といえれば紅葉のまつ盛りで、どこも行楽客でにぎわっているだろうに……。幾百里離れた他国の夜空は、霜が降って肌に浸み通るような寒気を覚え、コートやショールを出してしのぎました。

時は、十月二十日だったと思います。栃木小隊は団の一番北方に位置し、やっと弥栄の地に第一歩を踏み入れました。小隊正門までくると、先にきていた人たちが出迎えてくれました。また厚い歓迎の宴を催してくださりその場で一緒にきた花嫁さんを紹介して、夫婦の契りの盃を交わして、みんなで祝福をしました。その晩は、寂しさも寒さも感じませんでした。

時の流れは川のごとく、夢中で一カ月が過ぎようとしていました。主人は永豊鎮の弥栄共励組合に勤めている関係上、小隊長を斎藤さんにお願ひし、小隊の籍は従兄の蓮見さんと私の弟に頼み、私たち二人は役場の西隣の土塀長屋に越しました。そこは、東から平田先生、私たち、高山さん、工藤村長さん（単身赴任の

ころ)、草薙さんと五家族一つの長屋でした。それが三棟ありました。ほとんど役場職員、組合職員、農業打鉄勤めの人たちで満員でした。その真ん中につるべ井戸一つだけありました。草薙さんの奥様が体調を崩し内地療養のため帰国されました。その間、工藤村長さんのお食事を及ぼすながら私でもお引き受けすることになりましたが、草薙さんの奥様も三、四カ月ほどでお元気になり、戻ってこられました。

そのころはまだ永尊鎮には旅館がありませんでした。第一次武装移民地とあって、日を追うごとに視察団がくるようになり、旅館がないのには大いに困りました。そこで、旅館建築に取りかかり、九月下旬には完成し、東宮先生の御家族を第一号客としてお迎えする予定になりました。しかし、旅館を引き受ける適任者が見つからず困っていたようで、後任者が見つかるまででもよいからと頼まれてしまいました。主人も後任者が見つかるまでならよいのではないかというので、一応お引き受けすることになりました。

旅館の方もいよいよ完成、畳、布団、毛布、座布団、

接待道具、お勝手道具など着々と揃え、仲居さん一人、ポイラーとお風呂係の青年一人を雇い、料理は私が責任を持ち、来客を待つばかりとなりました。野菜や肉類は共励組合を通じて手に入るが、魚や果物は駐屯騎兵隊の酒保より譲ってもらうことになった。そのころは冷蔵庫がありませんから、お勝手の板張りの下にコンクリートで地下倉庫を造って利用していました。

九月中旬、お客第一号の東宮先生御一家をお迎えました。とにかく旅館の女将になろうとは夢にも思いませんでしたから、お客様の接待など全く分かりません。工藤様より東宮先生御家族様に、ずぶの素人の臨時雇いであることを申し上げ、不行届の点をお許しいただきますようにとお願いましたような次第でした。でも、奥様もご立派なお人柄でいろいろお話して下さったり、私どもの料理をお子様方も奥様も喜んでお召し上がりくださった。今でも昨日のように思え、弥栄総会のときお会いいたしますと、あの当時のことがいつも話題に出るのです。

その後、旅館に従事すること一年余り……。私の体

に変化が生じ、診察の結果妊娠と分かり、早急に後任を見つけていただきました。私たちは旅館の裏の福島先生の隣に引っ越し、やっと自由な身となりホッとなりました。

十一年九月、出産のため内地に帰りました。両親、弟妹たちが「もう一生会えないと思つていたのに、行つてから二年足らずで帰つてこられるとは……」と嬉し涙で迎えてくれました。

翌年二月、長女を出産、両親にすれば初孫なので殊のほかかわいくて、満州に帰すのが惜しいと涙ぐんでいました。でも五月下旬、満州に一緒に行つた弟が迎えにきてくれたので新潟港より現北朝鮮の清津港へ、更に凶住線に乗つて弥栄駅へと到着しました。父娘の初対面、百日足らずの赤子にしては大きすぎるとびっくりしていました。

そのころは、主人は相変わらず共励組合勤め、私は長男に恵まれ二人の子の養育に務めていました。が、ある日主人が体の不調を訴え一時小隊に帰り、清らかな空気を精いっぱい吸いながら、のんびりと暮らそう

と言い出しました。従兄を農建に勤めさせ、私の弟は佳木斯の国際運輸会社に就職させて小隊に帰ることにしました。しかし、主人の勤めは辞めることができず、小隊から共励組合まで六キロの道を通うことになりました。初めは歩きだったが、内地の兄姉から組立式の自転車を送つてもらつてからは、鉄道の側面を利用して通うようになりました。

中国人家族をもう一家族増やし、乳牛、鶏、豚、羊、蜜蜂など着々と増やし、小孩（少年）たちには牛や羊の放牧の世話、クーンニャン（娘）には子供の守役、ジャングイ（その家の主人）には自分たちの日常生活上の食物を作る耕作地を与えて自作させるという形で、よく働いてくれました。夜になると、狐、狸、狼、山猫などが山から下りてきては、羊や鶏がやられることもしばしばでした。反面、現地の動物はのんびりしているとみえて、狐や大きな山猫を生け捕りにしたこともありましたが、裏の踏切では、大きな狼が列車にひかれて死んでいたこともありました。また、追分峠の南下り坂の線路に匪賊が爆弾を仕掛け、列車が脱線し、

汽笛が一、二時間も鳴り響き、団員に出動命令が下り、騒然となったこともありました。

時のたつのは早いもので、子供たちも小学校入学の年齢を迎えるようになりました。そこで、茨城、群馬、栃木小隊の中間に仮校舎を建てました。生徒数わずか十数人。波多野先生御夫妻が赴任してこられ、子供たちも日を追うに連れて元気に楽しく通い始めました。翌年は、川本御夫妻と交代になり、生徒数も二十人を超すようになり、先生の良き御指導で、子供たちも楽しい毎日を過ごしていました。

ところで、昭和十七年四月ころより世の情勢が急変し、隊員の中でも特に海軍隊役さんたちに召集令状がくるようになりました。陸軍関係の方々にも若い方から漸次令状が届き、団員が日を追って少なくなってきました。一体どうなるのかと思うと夜も眠れない状態が続きました。とうとう栃木小隊の団員では主人一人だけ残り、全員召集されてしまいました。

主人は共励組合の金庫番をしていた関係上残されたのかと思っていましたら、昭和二十年七月二十八日、

とうとう召集令状がきてしまいました。五人の子供を抱えてこの先どうして生活していけるだろうか、不安になってしまい思案の日々を送るようになりました。

突然、八月十日の夜中十二時ごろ、雨の降る中、馬の蹄の音が近づいてきました。匪賊の襲撃かと思ひ、青酸カリを懐に、ジーツと耳をすまして聞き入っていました。蹄の音がますます近づいてきた。ここに至ってはどうしようもなく、覚悟を決めました。ところが、「佳木斯の騎兵隊の伝令です。ここは近く戦場化するから、明日午前五時までに永豊鎮駅前に集合するように。もしそれに間に合わなかった後は責任は負いません」とのこと。あまりの驚きに平常心を失い、子供たちの寝顔を見つめていた。そこへ裏の奥さんがきて、「越井さんどうする?」「私はとてもこの五人の子供を連れて逃げまどうことはできませんから……。子供たちとここで白決しようと思う」「とにかく、皆さんに心配かけると申し訳ないから満人の馬車で、永豊鎮の駅まで行ってみましょうよ」と慰められた。時計を見れば夜中の一時。外はどしゃ降りの雨。致し方なく、泣

き騒ぐ子供たちに防寒装備の支度。手荷物では持つて行けないので、できるだけ身に付けていくことにした。

三家族の満人を呼び、この家の物はみんなで仲良く分け合い、末長く暮らしてくれるように頼んだ。塩味饅頭とピンズを作ってもらい準備もできた。我が家に最後の別れと思うと無念の涙で、後ろ髪を引かれる思いだった。満人の馬車で永豊鎮駅まで送ってもらった。

二十年八月十二日、列車を待つこと八時間。人間を運ぶだけでも精いっぱいだったため、手荷物は最小限にと厳しく制限された。私は一年四カ月の赤ん坊を抱え、母乳は不足がちだったので代用の米粉と砂糖だけ。はと、九歳の長女に背負わせておいた。が、それも許されず駅の広場に投げ捨てられてしまった。午後五時、やっと列車が到着した。露満国境の鶴岡炭坑より石灰を運んでいる屋根もないおんぼろ貨物車で、すし詰め押し込まれた。発車まぎわになると、また雨が降り出し子供たちは泣き騒いでいた。

いざ出発、南へ進行すべきなのに、北方佳木斯に向かった。皆驚いた。聞くところによると、勃利駅が破

壊されて不通になり、佳木斯、綏化回りでハルビンに出るということだった。その上、この列車通過の後からは軍隊がこの鉄道を破壊していくとのことだった。

もはや行き先不明の感に打たれ、生きた心地がしなかった。雨は皮肉にも惜しみ無く降りしきり、佳木斯に着いてみれば見渡す限り火の海。ちょうど阪神大震災時の火災を見るがごとくだった。これで二度と弥栄村へは戻れないことが身にしみて分かった。

佳木斯を出て三日、持つて出た食料は雨に打たれ、満員列車で踏みつぶされ更に暑さと重なり食べられなくなってしまう。全員飲まず食わずで十五日綏化駅で下車させられた。そこから八キロほど離れた日本軍が建設中の飛行場まで、長蛇の列をなして歩き続けた。大きな格納庫にやっとたどり着いた。辺りは見渡す限りの大平原で、雨に打たれた衣類を野原に広げて乾かし、夜はその衣類を敷いたり掛けたりしてしのいだ。十六日早朝、子供たちを置いて昨日きた道を戻り、綏化駅前で食べ物を買集めてきた。やっと親子共々三日間の飢えを満たすことができたが、赤ん坊は乳が出

なくなつた乳房に必死になつて吸いついていた。乳房がちぎり取られるような痛さだったが、無理に引き離すこともできずつらかつた。翌日は満人が大きな籠を天びん棒に下げ、とうもろこし、饅頭、野菜などを売りにきてくれたので、ホッと一息つくことができた。

日を追うごとに、ジフテリア、ハシカ、カゼがはやり、手当ての仕様もなく死者が増えてきた。私の末っ子も、九月十一日とうとう帰らぬ人となつてしまつた。弥栄にいれば何の不自由もなく、十分な栄養がとれ大きく育つたものを……。既に三歳の節子もジフテリアにかかつていた。

北満の九月中旬といえは、霜が降りることがしばしばだ。このままここに置かれては、老人子供は全滅になつてしまう。そこでソ連司令部に懇願し、やつと九月十五日、まずは奉天までの許可をもらつた。綏化駅から客車に乗せられて発車したが、ハルビンの手前、松花江では何十人もの死体を葬つた。

ハルビンから奉天に向かう途中交差する列車には、武装解除された日本兵が満載させられ、北へ北へと向

かつて行つた。聞くところによると、戦争に負けたので、満州にいる日本兵はみんな日本に送るのだと嘘をつかれて、ソ連領に連れて行かれるらしい。私たちの列車は南へ南へと進行していった。とうとう節子もかほそい声で「お水ちょうだい。お水ちょうだい」と欲しがりながら息を引き取つた。

九月二十一日、奉天駅に到着した。ここで春日小学校を避難所とするはずだったが、下車してみると、ソ連兵は小銃を向けながら時計・メガネ・万年筆・指輪などを略奪、満人は大きな麻袋を持つて手当たり次第の略奪、大人も子供もほとんど裸同然にされてしまつた。これではとても奉天にはとどまれないということ、同列車で大連まで逃避行することになつた。大急ぎで死亡した子供たちの遺体を、奉天駅の反対側にあつた元日本軍の防空壕の中に葬り、無我夢中で列車に乗り込んだ。生き残つた三人の子供が抱きついて、お母さん、お母さんと泣き叫んでいるのがはるか遠くに聞こえるような感じだつた。そのうち正気に戻り子供たちを見たら、三人とも目を真っ赤に泣きはらしなが

ら私に固くしがみついていた。そこで三人の子供に「あなたたちはどんなにつらいことがあっても、こうしてお母さんと一緒にいられるけれど、洋子ちゃんや節ちゃんは満州の土になってしまい、日本には永遠に帰ることができないのよ」と、四人は固く抱き合つて泣いた。

列車内は熱砂のような蒸し暑さ、だれもが大連まで乗り換えなしで行けるのだから、少し窓を開け風を入れようと各窓を少しずつ開けてみました。ところが、五分も経たないうちにソ連兵が小銃を突きつけ「ドアを開ける」と、しきりに窓を叩いていました。だれかがしかたなく乗降口を開けたところ、数人のソ連兵が押し入り、腕に四個も五個もつけている腕時計を指して「こういうものや指輪などがあつたら出せ」、もはや、「みんな取りあげられてない」と言うのと、ぶつぶつ言いながら出て行った。その後から今度は、麻袋をを持った満人たちがどやどやと乱入してきて、網棚に脱いで置いた着衣衣を全部、我先にとかつさらつていった。親も子もまるで裸、はだして九月二十三日、やつ

と大連駅に着いたのだった。

私たちは大連に入った避難民一号ということで、大変手厚く涙・涙で出迎えてくださったのは本当にありがたく、とても忘れることはできません。南山の商業高校を避難所に設定しておいてもくれた。昨今テレビで見る東南アジアや戦鬪国の逃げまどう避難民と全く同じだった。飢えと疲れで倒れそうな体に鞭打ちながら子供たちを励まし、やつとの思いで避難所へたどりに着いた。大きな一教室に一小隊分と定められて、すぐに板の間に疲れ切った体を横たえてしまった。目が覚めて見ると、在留日本人民の温かい御厚意で、毛布・布団、衣類、食料品など、至れり尽くせりお世話を受けた。アツという間に一週間が過ぎてしまった。

いつまでも市民の善意に甘えていることもできないので、各々職を探し歩き回った。手っ取り早い仕事と言えば洗濯婦ぐらいしかなかったが、天地が逆になつてしまったのだから仕方がないだろう。汚いシラミだらけの中国服を一日中洗つても、日給は百円から百五十円。そのころ、米一升が三百五十円ぐらいしてい

たので、到底米などは求められず、粟のおかゆ、それも腹半分がやっという有様だった。このような状態でいったい内地へ到着するまで生き長らえるのだろうか、思っただけでも身も心も空しく感じたのだった。

そんな思いでいたところへ、元大連市立病院で外科医長をしていた知人が、突然尋ねてきて「寒さに向かつてここでは無理でしょうから、引揚船がくるまで私らのところにいるように」と親切にすすめてくれた。温かい言葉に甘え、三人の子供を連れて先生のお宅に行ってみると、奥様は既に亡くなられていて中学一年の男の子と小学四年の女の子がいた。お陰で私の子供二人も朝日小学校へ通わせてもらった。約半年間は、ありがたい生活を送ることができたが、ある日突然、先生が急死されてしまった。目の前が真っ暗闇となつてしまった。向かいの恩田先生が早速駆け付けてくださり、いろいろ世話をしてくれた。棺を造り、車で火葬場まで送りこんでくださり、御家族一同で参列してくださって、般若心経を霊前に唱えてくださったりした。一切の費用も先生が払ってくださった。さすが大

連市の市会議員になれる方は立派だと、ありがたく感涙した。浜田先生が亡くなったことを知った周りの満人たちが、毎夜のように手当たり次第略奪に入ってくるので、この家にいられなくなってきた。恩田先生に相談して、今度は先生のお子さん二人も一緒に五人の子供を連れて再び南山商業高校に引き揚げた。

さあ、これからが大変です。同僚の子供たちが石けん売りに出て、結構生活の足しになっているというので、上の三人を仲間に入れてもらった。下の二人は雨が降らない限りは、前に見える山に行つて薪拾いをするのが日課になった。私は再び中国人の家を回つての洗濯婦となり、生きるために夢中で働いた。

ある日、電車の中で油脂会社の社長さんという品の良い方に出会い、「もしよろしかったら、こういうところですから、おいでなさい」と声をかけられた。百パーセントは信用できなかったが、食べていくには背に腹は替えられないと思い、不安ながら翌日、早速行つてみた。今までの身の上話をするときよく聞いてくれるので、会社の内外の掃除や洗濯の仕事をさせてくれるこ

とになった。更に子供たちも一緒に連れてきて、昼食は子供たちも食べさせてくれるという。時には夕食まで食べさせてくれ、帰りには食べ残りの饅頭、ピンズなどを持たせてくれるので、子供たちは喜んで毎日付いてきた。昼休みには社員の満人たちとボール遊びをして楽しむことができた。

少々、お金にも余裕ができた。弥栄を出てから白米の御飯を一回も食べられなかった子供たちに、奮発して白米のおにぎり、焼き魚、カリントなどを持って、一日海水浴にでも連れて行こうかと、小隊の皆さんに相談した。もちろんみんな賛成してくれた。社長さんにも一日休ませてくれるよう頼んだら、快く承諾してくれ、その日の帰りには白米二升ほど持たせてくれた。人の心のぬくもりをしみじみと感じ、感謝の気持ちでいっぱいだった。

待ちに待った海水浴の日、子供たちは嬉しくてほとんど眠れなかったようだ。慰問でもらった服に着替え、市電に乗り二十人ほど出かけた。弥栄にいても海はなかったので海水浴は生まれて初めて。その喜びよう

は最高だった。いよいよ昼食の時間。弥栄を出て以来、白米のおにぎりを食べるのは初めてというので、我先にと駆け寄ってきたがどうでしょう。一番楽しみにしていたおにぎりの包みがなくなっているではないか。悔しいやら悲しいやらで、子供たちは「もう帰ろう」と言い出す始末。仕方なく露店でとうもろこしやねじれパンを買って腹ごしらえをして帰った。現在、長男は五十六歳になるが、今でも「何は忘れても、海へ行ったとき、お弁当を盗まれたことだけは絶対忘れないよ」と言っては笑っています。

避難生活二年目の十月ごろ、どこからともなく「コ口島からの引揚者連搬が終わったそうだから、今度はいよいよ大連港へ引揚船がくる」という噂が聞こえてきた。お正月までには母国の土を踏みたいものと念願していたので、夜になると教室の中央に集まり、弥栄を出てから一年半、長かった、つらかった、悔しかった、悲しかった思い出の数々を涙ながらに語り合い、「日本の土を踏むまでは頑張りましょうね」と励まし合った。

引揚船が大連港に入港してきた。昭和二十一年十二月二日だった。さっそく胸を躍らせながら、南山商高の避難民全員が埠頭に集結した。しかし持ち物検査、貨幣の交換などもろもろの手続のため、寒さの厳しい埠頭の貨幣置場のコンクリートの上で、五日間も待たされた。

十二月七日、貨物船を改造した引揚船にやっと乗り込んだ。ドラの音を合図に静かに港を離れるのを見届けるや否や、万歳の嵐。これでやっと故郷の土を踏めるのだという実感が湧くと同時に、今まで張り詰めていた気がブツリと切れ、涙がとめどなく出てくる。涙が枯れるまで海の彼方を茫然と眺めていた。と突然泣き声が聞こえ我にかえった。五歳のお子さんが乗船後まもなく亡くなられたので、この大海に水葬するのだという。私も緩化に一人、奉天に一人葬って悲しい別れをしてきたことを話し、互いに抱き合ってつらさをこらえた。玄界灘を通過するころには、大きな人食いザメが遺体の投げ込まれるのを待つかのように、十数頭船の両側に付いてきたのには本当に驚いた。

四日目の昼ごろ、水平線の遥か彼方に延々と続く島のような景色が見えてきた。みんな口々に「日本本土が見えた!」「内地だ!」と嬉し涙で互いに抱き合った。子供たちも船酔いも忘れて我先にとデッキに駆け上がり、「どれどれ、どこに見えるの?」と、たちまちデッキがいっぱいになった。その方を指して教えてやると「なあんだ、あれは山だよ」と、がっかりしたように言うので、「まだ、遠い距離なので、ほんやりとあのようにはしか見えなんだよ。だんだん近づくとはっきり見えてくるから、よく見ていてね」「フーン」と、だまって目をこらしてその方に見入っていた。

佐世保港に入港しました。検疫、消毒、税関などの手続で船中に置かれ、十二月十一日、二日ごろ、やっと日本本土に第一歩を踏みしめたのでした。——次の瞬間、自然とそこに座り北東に向かつて、「お父さん、お母さん、ただ今日本に上陸しました。御安心ください」と心の中で手を合わせ、報告しました。体育館のような大きな板張りの部屋で、安堵した一夜を過ごすことができました。子供たちも誘拐の心配はなくなり、

大きな船の出入りを珍しそうに眺めたり、辺りの広々とした景色に心ゆくまで羽を広げ遊び回っていました。

各県単位に別れ、引揚者の特別証明をいただき、目的地の栃木県大田原駅に着いたのが、十二月十五日午後七時ごろでした。駅には着いたが、実家までは二山も三山も越えなければなりません。連絡のしようがなく恥を忍んで、大連で大変お世話になった浜田先生がお勤めになられていた増山医院に行きました。わけを話して、一夜の宿をお願いしましたら、まるで乞食のような姿の親子を快くお受けくださいました。「この二人は、浜田先生のお子さんなんです」と言いましたら、非常にびっくりなされ、「浜田先生は？」と聞かれ、当時の様子を申し上げました。翌朝実家へ連絡してください、馬車で迎えにきてくれました。実家は親戚の人たちが集まっていて、「大変でしたね」「本当に御苦労様でしたね」と涙、涙で温かく迎えてくれました。また一番心配していた主人が、シベリアで元気であるという手紙が届いていると聞き、余りの嬉しさに母子抱き合って喜び合いました。預かってきた子供、二

人は、その祖父母宅にも事情はあったようでしたが、なんとか引き取ってもらいました。

翌二十二年十月十八日、主人の舞鶴港上陸の知らせが入りました。主人の好物の餅を持って義兄と迎えに行きましたら、既に、京都の国立病院に運ばれていました。聞けば戦闘中、頭に爆弾の破片が入って、意識がもうろうとしているとのこと。その後、栃木国立病院、東京第一病院、千葉国立病院と転々と回され、検査また検査で手を尽くしていただきましたが、破片が難所に入っているとのこと手術を間違えば、寝たきりの植物人間にもなりかねないとのこと、どの先生も手をつける気にならなかったようでした。その後は療養に努めました。

子供たちが成長するにつれ、いつまでも親戚の人たちに世話になつてもいられず、宇都宮に仮小屋を建て、タバコ、塩、切手販売の許可を取り、商売を始めました。主人もだんだん元気が出て、タバコ売場の番をするまでになりました。

三人の子供も大学を卒業し、社会人となった翌年、

主人は心筋梗塞で急死しました。そのとき次男は高校に入学したばかりでした。私は精いっぱい働き、やつと次男も大学を卒業させました。娘たちは、私が若いころの夢であった教員に、息子たちは技術者として、今はそれぞれ中年の社会人となっています。

現在、私は一人のんびりとお花を第二の子供として育てながら、ちぎり絵教室、習字教室へと気ままな日々を送っています。これもありとあらゆる苦勞をなめ尽くし、いかなることにも忍耐と努力のたまものと、今更ながら我が身に感謝しております。

逃避行の中でも、弥栄村は地元の駅より大連まで途中下車しながらも、貨車、客車にての避行でしたのでありがたかったのです。これもみな、犠牲になられた山崎団長さんはじめ、工藤村長さん、樺川県の副知事大貫大八先生ほか引率者の方々の並々ならぬお骨折りによりましたことを、深く深く感謝しております。ありがとうございました。

【執筆者の横顔】

栃木県下都賀郡赤津村で、麻商売の間屋をやっていた高田富四郎氏の九人弟妹の長女として生まれた静子さんである。

小学校の成績は優秀であり、名門の栃木女子高等学校に入学し華やかな出奔をした。

静子さんは高女を卒業して、師範の二部を出て学校で教鞭をとる希望を抱いていたが、両親の考えは、高女を出たら花嫁修業をして良縁を得て、結婚させることだったのである。両親の意見に従い、花嫁修業をしていた静子さんは、小学校の校長先生から、満州の永豊鎮で、第一次武装移民団の幹部で働いている、立派な独身の青年、越井操氏と結婚して満州開拓の花嫁になるよう懇請されたのである。静子さんは昭和十年、二十歳で渡満した。地区の古老・校長先生といった尊敬する人から導かれる糸口を希求する態度は正に非凡の才能があった。

ところが昭和十七年ころから、風雲情勢の急変にあい、やがて昭和二十年七月に御主人は召集され、八月

日本敗戦となつて満州国瓦解となり、北滿の開拓団は大連に向けて逃避した。ソ連軍の爆撃・暴行・略奪・死没者続出、阿鼻叫喚のさ中、末の子供の洋子さんが死亡、次に三歳の節子さんも死亡、残る三人の子供を連れて大連に着いて一年半、そして昭和二十一年十二月佐世保に引き揚げる事ができた。

翌二十二年十月、御主人はシベリアから傷病兵として帰国して、一人の子供をもうけた。

現在は、子供は皆大学を卒業して社会人となつている。娘さんは教員となつて、かつて若き日に静子さんが教壇に立つことを夢みたことを忘れずに、実現させたい喜び、老齢ながらその執念は偉人なる母性である。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

回想録 夕日に祈りて

東京都 熊井昭代

昭和十四年九月二十七日、先遣隊として満州に入植した父に伴われ、トラツクの荷台に乗り目ざす大泉^{だいせんし}福富開拓団に到着したのは、もう夜でした。暗闇のなかを手提げランプを手にした団員の方々が「お帰りなさい」と声をかけ、温かく迎えてくださいました。新築の家は、オンドルやペチカで暖かくアンペラの敷かれた室内は、ランプの灯が反射して予想以上に明るく、親しみをもって迎えてくれました。

翌朝、目覚めた私にとつて、初めてみる北滿の山野は、緩やかな稜線を描き、すっかり紅葉も終わつておりました。

本部内にある数カ所の井戸は、いずれも手巻式で、これも初めて見るものでした。水は鉄分が多く沸かすと茶色になり、生水は絶対飲んではいけないと言われ